News Letter

日本精神障害者リハビリテーション学会

ともに創る、ともに暮らす

01 第 31 回お台場大会
≫開催報告、大会企画者の声
≫研修セミナー報告
≫大会参加者の声
02 IPPO 賞受賞者紹介
03 学会誌投稿規定改定のお知らせ
04 第 32 回北海道大会のご案内
05 事務局移転のお知らせ

2025 年 3 月 発行

VOL. 65

学会誌「精神障害者とリハビリテーション」に投稿する方へ
6 月 30 日に投稿規定が変更されます。詳細は 11 ページをご参照ください

【事務局】 〒115-8560 東京都北区赤羽台一丁目 7 番 11 号
東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室（吉田研究室）
https://japr.jp Mail：japr.jimukyoku@gmail.com

01 ／第 31 回お台場大会　開催報告

大会長　肥田　裕久（医療法人社団宙麦会　理事長）

令和 6 年 12 月 13 日（土）～14 日（日）に、日本精神障害者リハビリテーション学会第３１回東京お台場大会を東京有明医療大学で開催し、全国からさまざまな立場の皆さんにお集り頂きました。ご参加頂いた方々の内訳としては、学会員２４４名、非学会員３４９名、当事者・家族・学生３１５名、総数９０８名となり、懇親会も２００名以上の方々にご参加頂き盛況に終えることができました。

本大会は「多様性と調和～台場シティで調う」を掲げ、大会長講演、大会シンポジウム、教育講演 2 演題、心理教育・家族教室ネットワークや SST 普及協会との共同開催シンポジウム、学会シンポジウム、学会特別研修セミナー、3 つの研修セミナー、野中賞・IPPO 賞受賞講演、ランチョンセミナー 4 演題、一般口演６０演題、ポスター発表３５演題、ワークショップ・自主企画２３演題と、最新の研究成果や実践報告の発表があり、活発な議論や交流が行われました。そして、多角的な視点から議論を深める機会となり、今後の研究や支援活動において重要な示唆を与える大会にもなりました。

また、特別講演として元サッカー日本代表の北澤豪さんから「障がい者スポーツの持つ力～共生社会の実現に向けて～」をテーマにご講演を頂き、更なるリハビリテーションの可能性を感じる機会も頂きました。

本大会を通じて、精神障害者リハビリテーションのさらなる発展に向けた新たな知見が得られたことを大変嬉しく思います。ご参加いただいた皆様、発表者の方々、そして大会運営にご協力頂いたすべての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

＜開催概要＞

学会名称　**日本精神障害者リハビリテーション学会第３１回東京お台場大会**

テーマ　**多様性と調和～台場シティで調う～**

会期　**2024 年 12 月 13 日（土）～14 日（日）**

開場　**東京有明医療大学**

参加者数　**908 名**

大会長　**肥田裕久（医療法人社団宙麦会ひだクリニック理事長）**

副大会長　**角田秋（東京有明医療大学看護学部看護学科教授）、佐々毅（医療法人社団宙麦会ひだクリニックお台場院長）**

実行委員長　**中田健士（株式会社ＭＡＲＳ代表取締役）**

次回大会は第 32 回札幌大会として、10 月 25 日（土）～26 日（日）の 2 日間にわたり、札幌医科大学での開催となります。多くのご参加をお待ちしています。

大会実行委員インタビューby 広報委員

大会実行委員長中田さん（株式会社　MARS）、ひだクリニックお台場副院長木村さんに大会終了後にインタビューさせていただきました。大会運営その苦労と楽しさについてリアルなところを聞かせていただきました。学会をより身近に感じていただき、来年度以降参加される方、企画される方は是非参考にしてください。（**黒字インタビュアー**）

▸どんなところに苦労がありましたか？

協賛（イベントの趣旨に賛成し、運営に協力すること、またはその団体）が集まりにくかったことです。参加者 1000 人を目指していましたが、一か月前までの登録が 500 人程度でしたし、700 人を超えなければ赤字だったので必死でした。宣伝は動画を作成して一年前から始めました。大勢の参加者に参加していただくために、魅力的な企画を考えたり、人を調整したりしました。日程調整やスケジュール調整にも気を使いました。今回精神障害者リハビリテーション学会とデイケア学会、ＳＳＴ普及協会学術大会の開催時期が近く、これらの学会は一部参加される人も重なっているため、日程が近すぎないようにする必要があります。またプログラム同士の時間の調整も必要です。自主企画シンポジウムは多めにしたかったので、こちらからもお仕事に関わっている方を中心に積極的に声を掛けました。2 か月前にはプログラムの周知をしないと参加者が伸びないので、早めに決めたかったのですが、ぎりぎりまで調整や確認が必要で、お問い合わせも多くいただきました。今回の大会の実行委員はひだクリニック（宙麦会）関係の職員中心に構成しており、人数が少なかった（25 名程度）ので大変でしたが、逆に連携は取りやすく決定もしやすい面もありました。製薬会社の協賛が少なかったのが今回の特徴です。

▸実行委員の実際の動きは？

2 年前から動き始めました。実行委員コアメンバーで月一回集まっていました。早く始めた分、開催前の半年程は油断していたところはあって（笑）。最後は細かな役割分担を決めきれなかったところに課題がありました。早めに役割分担を決めておくとよいかもしれません。実行委員総動員で動き出したのは前日からです。当日スタッフは 50 名ほど（MARS、宙麦会のピアスタッフ）でした。コアメンバーは大会前の二か月の間、普段の業務は 2 割程度であとの 8 割は大会準備に費やしていました。

▸会場はいつ頃きまりましたか？

2 年前です。もともと看護実習でつながりがあった東京有明医療大学の先生にお願いしました。大会はどこで実施するか、大会運営事務所をどこにするかが運営のカギです。それで大きく経費が変わってきます。細かいことですが、お弁当をお願いする場合も土日にある程度の個数を用意できるところを選定する必要があります。

▸終わってみて

（参加者は 1000 人近くで大成功でした）

今回の大会では、べてるの方が 10 人以上も来てくれたのが大きかったです。べてるの話を目的に参加された方も多かったのではないかと思っています。メンバーさんたちにお聞きしたところ、皆さん自分でためたお金でいらしているということでした。当事者家族の方もみなさん交通費と参加費を自身で払って参加されている方がいらっしゃいます。意識の高さを感じました。今回様々な企画が多くて、プログラムをホームページで解禁するたびに反響が大きかったです。

雑誌の取材依頼もありました。ピアサポーター関連の企画が 17 もあり、心理教育、SST 関連も充実していました。市民公開講演（一般社団法人日本障害者サッカー連盟会長講演）もよかったです。当日は東京有明医療大学教員 4 名、学生ボランティア 40 名、ピアスタッフ、家族会などが会場支援をしてくれました。当日から参加したスタッフでも対応できるように、手順書は綿密に作りました。会場が大学だったのでプロジェクター、マイクが配置されていたのはよかったです。足りない分は、PC9 台も含め MARS 事業所から持って行ってやりました。学会は大変だけれどチームワークができ、一致団結できるのがとても良いと

思っています。参加した方から来てよかったという声がたくさん聞かれたのでよかったです。

▸最後に一言

中田さん：一般演題の応募がそれほど多くなかったという印象があります。部屋によっては聴講者はいっぱい来ていて、部屋からあふれている状況でした。今後は発表をする人がふえ、部屋も大きくして聞ける人が増えてほしいと思います。

木村さん：精神リハ学会員が増えるように、こんなに楽しくて勉強になるんだ、という形にしたいです。どの学会にいっても同じような顔ぶれにならずに、多様な講師を呼べるような工夫があると幅がひろがるからいいなと思います。（**インタビュアー：佐抜、吉見**）

研修セミナー報告

本大会における研修セミナーは、最近のトピックを知る研修、基礎知識を学ぶ研修、研究・発表の技法を学ぶという研修というテーマで開催しました。また昨年、学会３０周年記念で開催された特別研修セミナーを今年も継続して行いました。以下、本研修セミナーを担当した学会研修委員から報告いたします。（研修委員会担当理事　坂本明子）

研修セミナーⅠ

権利条約の対日総括所見と精神保健福祉法改正

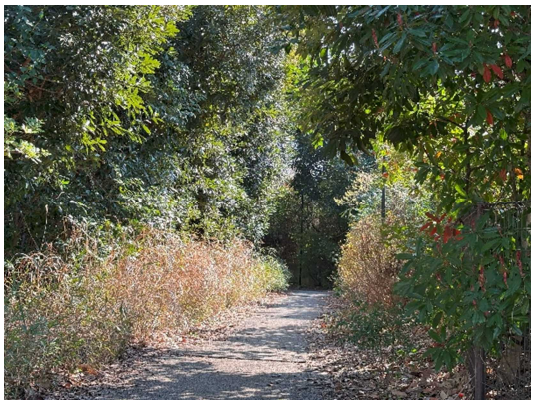
研修委員　坂本明子（久留米大学）

研修セミナーⅠでは、権利条約の対日総括所見と精神保健福祉法改正について池原毅和弁護士に、講演を頂きました。まずは、国際人権機関（障害者権利委員会、国連人権高等弁務官事務所）と世界保健機関（WHO）が一致して示しているゴールを共有されるところから始まりました。そのゴールは、障害者権利条約に従って、① 既存の強制や施設を廃止（non-coercion & de-institution）して② 権利に基づく（Rights-based）③ 地域に根差した（Community-based）④ 本人中心の（Person-Centered）⑤ リカバリー志向の（Recovery Oriented）精神保健福祉を実現することです。それから、権利条約の対日総括所見について説明され、強制入院と強制治療の違い、強制はコントロールできないこと、強制入院とアドボケイトとの両立はできないこと、長期の強制入院は人生被害であり、多重の侵害であることなどを指摘されました。最後に、日弁連がめざす強制入院制度廃止・脱施設化へのロードマップを提示され、「世界一番乗りを果たそう！」というメッセージで締められました。

続いて彼谷さんからは、ピアサポート、精神障害者の権利擁護、厚生労働省の厚生労働科学研究、調査研究事業等に関わってこられた中で、当事者の視点から意識してきたことについてお話しいただきました。そして、精神保健福祉法法改正における権利擁護としての新たな取り組みである入院者訪問支援事業についてご紹介頂きました。

朝一番という時間帯に、また同時間帯に多くの企画があったにも関わらず、70 名を超すご参加を頂きました。真剣に聞いておられた方が多く、ハッとさせられた、考えさせられたというコメントも多く頂きました。

「道の方向を指差すこと、そして、草を刈って舗装する仕事と一緒に手を動かす人が道をつくる」最後に、彼谷さんは、そうおっしゃっていました。私たちは、池原弁護士が提示したゴールに向かって、共に道をつくることができるでしょうか。そのために自分に何ができるのか、考えさせられる学びの時間でした。



（Photo by 吉見）

研修セミナーⅡ

自分の実践を学会発表で効果的に伝えるためのスキルアップ講座

研修委員　坂本明子（久留米大学）

本研修セミナーは、国立精神・神経医療研究センターの山口創生さんから、スライドやポスターの作成方法を中心に学会発表で効果的に伝えるコツについてご教授頂きました。山口さん自身のプレゼンテーションに関するご苦労の経験を踏まえ、これまで学んでこられた「型」「お作法」に関する構成やコツ、スキル、小技などをレクチャーして頂きました。そして、同じ実践報告で良いスライドと悪いスライド、よいポスターと悪いポスターをご紹介していただき、それをグループで比較し、話し合いました。グループでは活発に意見が出され、より効果的な発表の方法が見えてきました。最後は、グループで、実践報告論文をもとに、紙を使ってスライドを作成する練習をしました。短時間であるにもかかわらず、グループごとにポイントを押さえたわかりやすいポスターが作成されていました。研修中にすでにスキルアップされているようでした。

参加者からは、自分の発表にも役立つ内容でしたが、指導する立場にいる者にとっても大変参考になったという感想を頂きました。この研修セミナーを受講した後、大会会場に貼られたポスター発表への眼差しが変わったことは言うまでもありません。

研修セミナーⅢ

初めての人も、知ってる人も、一緒に学ぼう！～みんなに笑顔がかえるストレングスモデル実践

研修委員和泉亮（フクシのみらいデザイン研究所）

ストレングスモデルの 6 原則

1　精神障がい者は回復し、彼らの生活を改善し質を高めることができる。

原則 2　焦点は病理でなく個人の強みである。

原則 3　地域は資源のオアシスとしてとらえる。

原則 4　クライエントは支援プロセスの監督者である。

原則 5　ケースマネージャーとクライエントの関係が根本であり本質である。

原則 6　我々の仕事の場所は地域である。

研修セミナーⅢは講師に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所の久永文恵さんと一般社団法人 Q-ACT 精神保健福祉士の須田竜太さんをお招きし開催しました。ほぼ会場の椅子が埋まる盛況ぶりで、大変活気のあるセミナーとなりました。

研修ではまず、久永さんよりストレングスモデルについての講義があり、その後、須田さんより実践に基づいた中でのストレングスアセスメントに関しての報告もありました。またその内容を踏まえての参加者同士の演習として、相談者と

聞き手に分かれストレングスアセスメントを体験する機会も持ちました。

特に印象的だった点として、Q-ACT でアウトリーチの実践をされている須田さんのお話から、ストレングスモデルは施設や病院の中ではなくアウトリーチが基本であるというお話が強調されていた点です。本人のストレングスも環境のストレングスも、生活の場でこそ、見つけ出せるのであるというお話など、ストレングスアセスメントの視点が、さまざまな実践場面で活かせるものだと感じ、参加者にとって非常に有意義な研修となったと考えます。

学会研修特別セミナー―

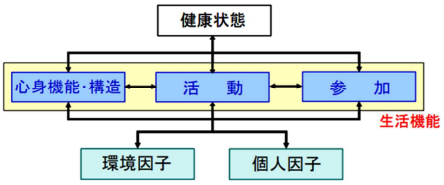
精神障害者リハビリテーション学会 30 年の歴史をキーパーソンが語り合う」（第 2 弾）

研修委員　船越明子（神戸市看護大学）

「学会創立時に大事にした理念と今後の発展への期待　医療領域から精リハ学会設立と展開について思うこと」をテーマに、樽谷精一郎さん（新阿武山病院）と坂本明子さん（久留米大学文学部社会福祉学科）の進行で、演者である安西信雄さん（帝京平成大学大学院　臨床心理学研究科）、松為信雄（神奈川県立保健福祉大学　名誉教授）さん、田中英樹（早稲田大学人間科学学術院　名誉教授）さんが、学会設立後の動きを振り返りました。学会を長年支えてこられた重鎮が今思うことを率直に語られ、和やかな雰囲気でしたが、襟を正して聞かねばと思わせる緊張した空気も感じられました。

ICF において生活モデルが重視され、法定雇用率に精神障害者が含まれるようになり、就労支援においては「雇用の質・支援の質・本人のキャリア志向」が三位一体として取り組まれる必要があるという話は非常に心に残りました。障害があっても働くことが普通になる社会は、実は、すぐそこにあるのかもしれません。また、evidence based と value based の両方が大切だという考えも話されました。いくら効果があっても、そこに価値と倫理がなければ意味がないということでしょう。

図　ICFの生活機能モデル



（厚生労働省 HP より転記）

最後に、「精神障害リハビリテーション学」（金剛出版）の発刊から四半世紀経ち、その間に SST、IPS、ACT などグローバルな概念も普及したことから、改訂の必要性が指摘されました。セミナー後は、宿題を言い渡されたような、大切なバトンを託されたような不思議な高揚感を感じました。

大会参加者の声～インタビューby 広報委員会（インタビュアー：佐抜、吉見）

大会に参加されていた方々にお声がけをして、インタビューさせていただきました。快くインタビューに応じていただいた皆様、ありがとうございました！来年度の大会参加の参考になれば幸いです。

▸一般演題で発表

就労継続支援A型クリエイトプレイスAホープ
副施設長　濱田　真紀子さん

今回が初めての参加です。一般演題で発表することを目的に参加しました。他の演題が見られることも楽しみでした。大分から参加していますので少し遊んで帰ろうかなとも思っています（笑）。

大会に期待することは？就労関連の施設からの演題や企画が多いといいなと思いました。

大会はどうでしたか？面白いなと思いました。企画のタイトルが面白い（笑）。学会は堅いイメージがあったが、リラックスできる感じでした。就労支援施設A型の加算の要件の一つに「学会発表」が含まれています。今回は施設の利用者さんにアプローチしたので、発表をしたい、自分の中でもまとめたいと思いました。緊張したけれど、自分で振り返れたのが良かったです。自分の中だけでとどめておくだけでなく、言語化されたのがよかった。ご質問をいただくと自己理解も深まります。そもそも将来どうなりたいかもわからない、という方にきっかけになればいいなと思って発表しました。

次回も参加しますか？是非参加したいです。会社から理解が得られれば（笑）。

▸自主企画で発表

特定医療法人大阪精神医学研究所新阿武山病院
副院長、大阪医科薬科大学　臨床教育准教授、
本学会理事　樽谷精一郎さん

大会への参加は7回目です。大会の実行委員長をすることになり、視察のために参加したのが初回でした。この企画は自分が参加し始めてから3回目です。浅見先生（第29回群馬大会大会長）がずっと続けられていた企画にたまたま参加し、そのまま参加し続けています。企画の魅力にとりつかれ、気が付いたときには企画をする側になっていました。この企画の大きな目的は支援者支援、つまり臨床現場でどうするか考えるということです。もともとは2か月に一回勉強会を行っており、連続性がある企画なんです。企画者は医師6人なんですが、今回も参加者に医師はいなかったのが残念でした。参加者の皆さんにはこの場から元気を持って帰ってもらって、それが明日の力になったら嬉しいなと思っています。

自主企画をやろうと思ったら？

発表し続けることが大事だと思います。口頭発表をしながら横のつながりを作っていって、仲間を作っていく。大会に参加して気になったことは質問することで、つながりができていくことが大切だと思います。

次回も参加しますか？

次回もちろん参加します。学会員も増やしたいです。コメディカルの方も継続的に参加してもらえたらと願っています。

学会員を増やすいい方法はありますか？

会員の人だけのホームページの充実や魅力的な動画の公開などを考えています。また、研修委員会の動画や研修セミナーの動画などはよいのではないかと思います。

▸ポスター発表

札幌医科大学　作業療法学第二講座
講師　横山和樹さん

大会への参加は5回目です。発表は3回目です。今回はピアスタッフが大切にしたいことの発表をするために参加しました。多職種共働で発表できるのが精神障害者リハビリテーション学会だと思っています。そういう土壌がありますし、当事者の方が参加しやすい雰囲気があります。

大会に期待することは？
今の取り組みでも十分だと思っていますが、実践報告を学術的にも議論ができる場であることを期待しています。
次回も参加しますか？
次回の札幌大会は札幌医科大学が会場で、私も実行委員会に参画しています。これまでの学会と同様に、多職種・当事者の方々が参加しやすい学会を目指しています。今回の発表は、ピアスタッフの倫理理綱領や業務指針の作成に向けて、さらに学術的に深め、共同研究として発表することを予定しています。

▸福祉展示コーナー出店

就労継続支援B型事業所　ムジナの庭サービス管理責任者　関亦マヤさん（精神保健福祉士）、利用者　後藤真子さん（当事者）
大会には、福祉展示コーナー出店のために、初めて参加しました。印象として自分たちの作品や活動に関心を持って立ち止まってくださる方が多かったのでうれしかったです。

学会に参加してみてどうでしたか？学会と聞くとお医者さんがいてスーツを着てという敷居の高いイメージがありましたが、そんなことはありませんでした。大会の運営者やプログラムの企画者の工夫があるからかもしれないですが、緊張が少なくて明るい雰囲気だったので楽しめました。やはり一度参加してみないと分からないと思いました。次回も参加してみたいです。（後藤真子）

▸ご家族で参加

ピアサポートグループ在、リカバリーカレッジよこはま準備委員会　加藤伸輔さん
リンクよこはま訪問看護ステーション、精神科認定看護師　ゆかりさん
ゆかりさん：夫婦二人で参加したのは２回目です。夫婦それぞれだと、私が６回、夫が３回ですね。今回のように近場だと、夫婦と子連れで参加できます。ただ、２日通しでの参加はさすがに大変なので、家族で１泊宿泊しました。それでも、毎年参加できたらいいなと思っています。この大会は、当事者も、ピアで活動している人も家族も、医療、福祉関係者も参加できます。いろいろな立場の人が対等に学びあえるんです。**伸輔さん：**参加者層が広いので立場を問わずだれでも気軽に参加しやすく、学びが多い場です。ここ数年は発表する側で自主企画にかかわっているのでより楽しく参加しています。**ゆかりさん：**普段全国に散らばっている仲間と会えるのがうれしいです。同窓会的な感じで。今大会では５年ぶりに会えた人もいました。
大会に期待することは？伸輔さん：今後は、もっとたくさんの当事者が参加しやすくなればいいなと思います。あまり専門的になりすぎると参加のハードルが上がってしまいますが、大会の実行委員の中には当事者として関わっている方もおり、その存在が参加しやすい環境を作っているのではないでしょうか。さらに、実行委員として関わる当事者が増えれば、より開かれた場になっていくのではないかと思います。**ゆかりさん：**引き続き、多様な人たちが参加できる場所であってほしいですね。
学会に参加してみてどうでしたか？ゆかりさん：今回子連れが意外と多かったです。よちよち歩きのお子さんを連れたお母さんがいたり、小学生連れのお父さんがいたり。子供当事者向けのプログラムもありました。我が家としては子連れで行くことへの敷居が下がってよかったです。グループワークで参加した人にも子連れで学会に参加した経験をもつ方がいました。子育ての中で学びの機会が減ってしまいがちですが、今回子供を連れて参加できたのは良かったです。**伸輔さん：**娘の世話があるため、行きたい場所に行けなかったのは少し残念でした（笑）。託児所があれば、もっと参加しやすいかなと思いました。**ゆかりさん：**プレイコーナーでもいいかもしれません。企画では、パネルで全国の事業所の既存の枠にとらわれない、面白い取り組みの紹介があってもいいなと思いました。

02 / IPPO 賞受賞者紹介

実践賞委員会委員長　千葉　理恵

受賞者紹介

2024 年度 IPPO 賞受賞機関の選考

IPPO 賞は、精神医療・精神保健福祉の分野で優れた支援を実践している機関・団体を表彰する賞です。IPPO の正式名称は Interactive Person-centered Practice and Organization（双方向性かつ当事者中心の実践・機関）で、この分野で新しい一歩（IPPO）をふみ出すようなチャレンジをしている機関・団体に光をあてるという意味も込められています。旧称ベストプラクティス賞の趣旨を引き継いで、2024 年度は、IPPO 賞としては 3 回目の選考・表彰となりました。

2024 年度の IPPO 賞の選考は、IPPO 賞の 10 基準と、1 つ 1 つの応募機関からの申請書類の内容に基づき、3 つのノミネート機関を対象として厳正に行われました。いずれの機関でも大変ユニークですばらしい実践が行われていて難しい選考になりましたが、最終的に、理事会において**「岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会」**が受賞機関として決定いたしました。

学会ホームページには、岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会および、ノミネートされた東京大学医学系研究科 医学のダイバーシティ教育研究センターと一般社団法人 Q-ACT の問合せ先を掲載しています。
(https://japr.jp/lecture/bestpractice/)

岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会（以下、岡山ネット懇（通称名））のご紹介

岡山ネット懇は、多彩な機関・専門職・個人が協働して、困難な事情にある多様な方の、居住場所の確保、具体的な生活支援の提供、権利擁護の向上を推進することを支援の理念としています。ネット懇から生まれた NPO 法人などの団体が、行政や医療・福祉などと協働して、県内各地での専門職による無料なんでも相談会の開催、精神科医療アドボケイト、多職種による触法障害者支援や被虐待者へ支援、後見受託法人運営や居住支援、食糧支援、子ども・母子支援などのとても幅広い支援を行い、精神障害者を含む障害者や認知症高齢者、未成年者の権利を擁護し、地域生活を支えています。さらに、岡山ネット懇の大きな特徴の一つとして挙げられるのは、法律家が核となってネットワークを構築して、医療や福祉の専門職者とともに支援の輪を広げている点です。具体的には、弁護士、司法書士、行政書士、社会保険労務士、税理士などの専門職者が関わり、さらに社会福祉士や精神保健福祉士などの専門職者も協働して、福祉や医療の支援にもつなげています。

岡山ネット懇の活動として特に高く評価されたのは、制度ありきの実践ではなく対象者のニーズや人権に基づいて支援が展開されている点や、法律家が中心になってネットワークが作られている点、岡山という広域で、地域ネットワークを生かした取り組みをしている点などでした。岡山以外の地域でも、法律家などとともに新たな支援を広げていくことができる可能性を示す、モデルとなるような実践であると評価されました。岡山ネット懇の活動の詳細については、学会誌「精神障害とリハビリテーション」Vol. 29 No.1（2025 年 6 月発行予定）でも紹介される予定です。ぜひご覧ください。

2025 年度 IPPO 賞募集のお知らせ

実践賞委員会では、今年度は例年よりも 2 か月ほど早く、2 月に IPPO 賞の募集を開始しました。応募の締め切りは 2025 年 7 月 15 日となります。長年の実績がある機関・団体だけでなく、よりよいサービスの発展につながるような新しい実践や、キラリと光る先鋭的な実践をしている機関・団体も選考の対象になります。受賞機関は学会や学会誌で実践について紹介することができます。さらに、受賞機関とノミネート機関は、学会ホームページで紹介され、多くの人に知ってもらう機会になります。支援者や支援を受けている人がそうした実践を知ることは、よりよい支援がさらに広がる IPPO となっていくと思います。様々な形で支援に取り組んでいらっしゃる皆様、ぜひ IPPO ふみ出し、応募して取り組みを紹介していただけませんか。また、日本精神障害者リハビリテーションの会員の方が 1 名以上いらっしゃる機関・団体であればご応募いただけますので、すてきな支援をしている機関・団体をご存知の皆様には、ぜひ応募を推薦していただけたらと思います。応募に関する詳細については、学会 HP をご覧ください(https://japr.jp/lecture/bestpractice/)。

03 / 学会誌投稿規定改定のお知らせ

編集委員会委員長　山口　創生

本学会の機関誌「精神障害とリハビリテーション」の投稿規定が、**2025 年 6 月 30 日**から変更されます。2025 年 6 月後半にはホームページに、また、6 月末に発刊する「精神障害とリハビリテーション」29 巻 1 号でも投稿規定の簡易版を掲載予定です。**6 月 30 日以降**に論文投稿を検討される方は、新しい投稿規定に沿って論文を作成していただきますようお願い申し上げます。代表的な変更を下記に記します。

1. 論文種別の変更
新しい投稿規定では、著者は下記 6 つの論文種別から選択していただきます。
①総説、②原著、③研究ノート、④事例・実践報告、⑤資料、⑥当事者・家族のナラティブ

2. 投稿の際に提出が必要なファイル
全ての投稿に「投稿点検リスト」の提出が必要です。総説・原著・研究ノートには「報告ガイドラインのチェックリスト」の提出も必要となります。

3. 著者の会員要件の変更
筆頭著者および責任著者が会員であれば投稿が可能となります。可能であれば、その他の著者にも入会をご検討いただけると嬉しいです。

4. 規定文字数の変更と補助ファイルの利用
各種別の規定文字数が変わります。特に①総説、②原著、③研究ノートについてはこれまでよりも記載可能な文字数が増加する予定です。また、①総説、②原著、③研究ノートでは、紙面媒体では掲載せず、精リハ学会のホームページ上で閲覧可能なオンライン補助ファイルの使用も可能となります。

5. 投稿方法の変更
E メールで事務局に送付していただきます。

6. 文献リストにおける文献の順番
文献リストの順番が出現順となります。

その他にも変更点が多くありますので、2025 年 6 月 30 日以降に論文を投稿する方は必ずホームページで投稿規定をご確認ください。

04 / 第 32 回札幌大会のご案内

大会長　池田　望（札幌医科大学保健医療学部作業療法学科）

この度、日本精神障害者リハビリテーション学会第 32 回札幌大会を、2025 年 10 月 25 日（土）・26 日（日）の 2 日間、札幌医科大学にて開催いたします。

近年、医療研究開発においては、患者や市民の参加の重要性が広く認識されるようになってきました。これは精神障害リハビリテーションの領域においても同様であり、むしろその必要性は一層高まっているといえます。本学会は、異なる専門分野が交差する学際的な議論の場として発足し、現在では障害をもつ当事者や家族も積極的に参加する場となっています。学会のスローガンには「ともに創る、ともに暮らす」を掲げ、実践と理論の両面から精神障害リハビリテーションの発展に貢献してきました。

今回の札幌大会では、「『ともにつくる』を北の大地で考える―共創社会の未来に向けて―」をテーマに掲げました。「共創（co-creation）」という言葉をあえて用いたのは、「価値の創出」や「自己と他者、環境は完全には分離できない」という非分離性の概念が含まれているためです。これからの精神障害リハビリテーションには、多様な立場の人々が協働し、それぞれにとって価値ある社会を共に創り上げていく視点が求められるのではないでしょうか。

現在、研究者、専門職、当事者、家族など、さまざまな立場の方々が実行委員会に参加し、開催に向けた準備を進めています。プログラムには、一般演題に加え、各種講演、シンポジウム、研修企画、自主企画プログラムなどを予定しています。特別講演には、東京大学先端科学技術研究センター 当事者研究分野の熊谷晋一郎先生、市民公開講座には映画『どうすればよかったか？』の藤野知明監督をお迎えする予定です。北海道での開催は、2000 年の帯広大会、2010 年の浦河大会に続き、今回が 3 回目となります。これまでの歴史を踏まえ、北海道ならではの視点を取り入れたプログラムも検討しています。本大会が、多様な立場の人々がつながり、より良い社会とリハビリテーションのあり方について議論を深める場となることを願っています。

10 月下旬の北海道は、紅葉が美しく色づき、秋の味覚も存分に楽しめる季節です。本大会のポスターおよびホームページのデザインには、北海道在住の障害をもつ作家・千葉由佳里さんの作品『カラフルでゆかいな仲間たち～世界に向けて～』を使用させていただきました。作品の豊かな色彩と表現もぜひご鑑賞ください。

多くの皆さまのご参加を、心よりお待ちしております。

事務局移転のお知らせ

会員の皆さま、お世話になっております。学会事務局長の東洋大学の吉田と申します。

2025 年 4 月より、事務局が札幌医科大学保健医療学部作業療法学科の池田望理事のもとに移動いたします。2017 年 1 月より、事務局を預からせていただき、学会の移り変わりを 8 年近く、感じさせていただきました。元来、本学会は多職種での学際的な場所でありましたが、ここ最近は、当事者の方の発信や交流の場としても、期待される場になってきたかと存じます。そのような場の環境づくりに僅かばかりですが従事させていただいたことを、光栄に思う次第です。新しい事務局の正式な連絡先などは 4 月に追ってご連絡申し上げますが、こうした場のあり方が、池田理事のもとで、さらに進化していくことを期待しております。

会員の皆様におかれましては、学会活動のみならず会費の納入や各種お手続きなど、事務局の運営にもご協力いただき、ありがとうございました。重ねて感謝申し上げます。

（学会事務局長：東洋大学大学院ライフデザイン学研究科　吉田光爾）

編集後記

学会が終わって早くも 3 か月たちました。学会で得られた気づき、驚き、感動などがもう一度皆様のもとに届くように、様々な会員の皆様のご協力を得て、ニューズレターを作成いたしました。来年度の学会は今年度より 2 か月早い１０月です。ぜひ早めのご準備を！それでは、北海道でお会いしましょう。（広報委員：吉見明香）

年度末になり慌ただしい日々を過ごしている方も多いのではないでしょうか。私は転職やこどもの就学を控え、4 月から始まる新たな生活スタイルに大きな希望と少しの不安を抱えています。

広報委員会も新体制となり 2 年目に入ります。引き続き広報の充実に向けて活動に励んでまいります。（広報委員：佐抜）

News Letter

VOL.65

2025 年 03 月発行

日本精神障害者リハビリテーション学会

【事務局】

〒115-8560　東京都北区赤羽台一丁目 7 番 11 号

東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室（吉田研究室）

https://japr.jp　Mail：japr.jimukyoku@gmail.com